

# 時の流れの生き証人

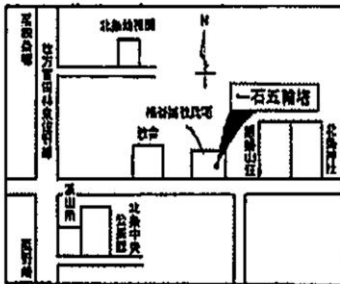


## 一石五輪塔

### 北条五丁目

一石五輪塔は、北条五丁目の横谷職教さん宅敷地内の北条山行者堂のなかにある。行者堂に建てられた大きな石碑の裏手にあり、並んで建つ高さ一尺ほどの五輪塔に仕立てた塔の方が目立つため、一石五輪塔はほとん

ど人目につくことはなくひっそりと建っている。大きさは、高さ約五十センチ、幅は一番下の方形の部分で十五センチ。五輪塔は、すべてのものは地・水・火・風・空の五つからできているとする仏教思想に基づき、それらを



表す石を積み重ねたもの。平安時代から作り始められ、簡素で飾りけがなく、多くは武士によって造立された。堂の落成や仏像の開眼供養を目的にしていたが、鎌倉時代以後は死者の供養や墓石として作られるようになった。石の形は下から、方形、円、三角、半月、先のとがった玉になっており、石を積み重ねて作られているものが多く、一つの石でできているのは珍しい。

# 時の流れの生き証人

## 須波麻神社の燈籠

### 中垣内二丁目



伊勢参りは、ひそかに出発し拾遺の施しに願って参ることが多く、おかげ参りと呼ばれた。最も盛況だったのは文政十三(一八一〇)年で、阿波地方で発生したおかげ参りの群衆は、河内、大和地方に至り村をあげての踊りにまで発展し

た。中垣内二丁目の須波麻(すはま)神社入口左に廻り高さ約二・五尺の燈籠(とうろう)は、この時のおかげ参りを記念に建てられたものでおかげ燈籠と呼ばれる。この燈籠は道標の役目も兼ねており、近くの東高野街道筋から移された



ものである。須波麻神社の名前は、平安時代に編纂された書物『延喜式』のなかの全国の神社を調査して列挙した「神名帳」に市内の神社としては唯一載っており、市内最古の神社とされている。八世紀に多く使用された万葉がなで表された名前が、現在まで継承されているのも注目される。